

# 研究ノート

## 紫式部の人物評価と考え

—『紫式部日記』から読み解く—

綾 香水子

### 一 論文の目的と研究方法

私が今回「紫式部の人物評価と考え」について論文を書いた目的として二つある。一つ目に「源氏物語の作者以外の女房としての紫式部」はどういう人物なのか、どういう考えを持っていたのかを知りたかったからである。紫式部と聞くと『源氏物語』を思い浮かべることが多く、私も作者自身について詳しく知らなかった。そのため、人物評価が記されている箇所を読み解くことで、紫式部について知ることができると考えた。

二つ目に『紫式部日記』には彰子の子の敦成親王の誕生の宮中の様子だけでなく、殿上人や女房などの評価や藤原道長との関係性が書かれており、人物評価に関しては従来の説では私情が述べられていたとされているが、日記の作者としての立場からはたしてそうであるのかを考えたかったためである。

二つの目的を研究するために、『紫式部日記』を読み解いて、「紫式部の歴史」「紫式部日記について」「日記から見る人物評価の違い」という三つの章に分け、三つの人物評価の違いについては女房、齋宮、殿上人、藤原道長に細分化して研究を行った。

### 二 『紫式部日記』とは

研究結果を述べる前に『紫式部日記』について説明する。『紫式部日記』の成立は寛弘七（一〇一〇）年頃と考えられており、この時代は藤原道長が政権を持つようとしていた時代であった。成立の時期については確定ではなく、複数ある説の一つである。執筆の経緯については、道長の娘である中宮彰子が妊娠五ヶ月を迎えたことで法花三十請を開始した。行事などは従来、男性によって漢文で書かれていたが、女性のために仮名で散文を書

く事ができた紫式部に出産前後の身辺の諸行事を記録するように命じたためである。内容については、寛弘五(一〇〇八)年七月から二年後の正月までの宮廷を書いた宮廷日記で、前半は初秋の土御門邸の描写から書かれており、後半は消息文の部分があり、紫式部はこの文体で人物評価を記している。

### 三 紫式部の人物評価について

『紫式部日記』には女房、齋宮、殿上人、藤原道長だけでなく、仕えていた中宮彰子の性格やその性格になった原因とその影響、他人から見た紫式部についても次のように詳しく述べている。

#### ・中宮彰子の評価

さるは、宮の御心あかぬところなく、らうらうしく心にくくおはしますものを、あまりものづつみせさせたまへる御心に、何ともいひ出てじ、いひ出でたらむも、うしろやすく恥なき人は、よにかたいものをおぼしならひたり。(中略)ことにふかき用意なき人の、所につけてわれは顔なるが、なまひがひがしきことども、ものをのりにいひだしたりけるを、まだいとをさなきほどにおはしまして、世になうかたはなりと聞こしめしおぼほししみにければ、ただ

ことなるとがなくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしきに、うち見めいたる人のむすめどもは、みないとよやかなひきこえさせたるほどに、かくならひにけるとぞ、心得てはべる。

#### (現代語訳)

というのも実は、中宮様の御心は何一つ不足なところもなく、全てに行き届いて奥ゆかしくおいでですが、あまりに内気でいらつしやる御心には進んで何とも言い出すまい、たとえ言い出しても気づかない後悔しないですむような人はめったにいないものと思ひこんでおいでです。(中略)とりわけ深い心遣いが無い人でこの所で得意顔になつてゐる人が、いかにも筋が通らないことをものの折りに言い出したのをまだとても幼い頃でいらして、世にまたとない酷さとお聞きになり、思ひこまれてゐるため、ただ目立った欠点がなくして過ぐすのを無難なことと思ひになつてゐられる、そのお気持ちに、いささか子供っぽい娘々した女房達がみなよくお仕え申しあげてゐるので、こんな地味な氣風に慣れてしまつたのだと私は思つてゐます。

原文から紫式部は彰子の性格を内気な性格だとしてゐる。その原因として安易に目立つことは酷いことだと聞

いてきた彰子は、悪目立ちしない生活を送ることが良いことだと思ひこみ、その気持ちか叶うように娘々しい女房が仕え、その環境に慣れたためだとしている。この彰子の性格は、ただの性格というものではなく、周囲の人々に影響を与えており、そのことが分かる箇所がある

#### ・彰子の性格の影響

さりとて、心にくくもありはず、とりはづせば、いとあはつけいことも出でくるものから、なさけなくひき入りたる、かうしてもあらなむとおぼしのたまはずれど、そのならひなほり難く、また、今ようの君達といふもの、たふるるかたにて、あるかぎりみなまめな人なり。

#### (現代語訳)

とはいえ、奥ゆかしさばかりの状態で居続けることもできず、うっかりすれば、非常に落着きに欠けることも出てくるものの、風情もなく引きこもっており、中宮さまも、もっと積極的になつてほしいと思ひになり、お口にも出されるのですが、女房達の控え目な風習はなおりにくく、また、現代風の貴族の息子というのも、この雰囲気に従つて、ここにいた間はみな実直な人ばかりです。

彰子の内気で控え目な性格は、女房達に奥ゆかしさという面と風情がなく引きこもりがちという面を与え、直そうとしても直りにくいほど浸透していることが分かる。

また、「たふるるかたにて、あるかぎりみなまめな人なり」とあるように、当時の貴族達は女房の控え目な雰囲気に従つて、実直な人ばかりになっていることが分かる。つまり、彰子の性格は女房だけでなく、男性貴族にまで及んでおり、彰子に仕えていた紫式部もその影響を強く受けていた可能性が高いと思われる。

では、彰子の影響を受けた紫式部はどのような人物評価を行ったのか。まず女房の評価について述べる。

#### ・女房の在り方

まず紫式部は女房全体の評価をした上で、良い女房と悪い女房をそれぞれ実在する女房を例に挙げ、説明している。女房の人物評価と在り方について、次のように述べている。

様よう、すべて人はおいらかに、少し心おきてのどかに、おちるぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人がらくせなく、かたはらのため見えにくきませずだになりぬれば、にくうははべ

るまし。

(現代語訳)

見苦しくない、全ての女性は穏やかで、少し心の持ち方ものどかで、ゆったりとして落ち着いていることを基本としてこそ、品位も風情も趣深く安心です。もしくは、色っぽく浮気っぽくはあるけども、本性は人柄は癖がなく、周囲の人にも付き合いくらいの様子を感じさせないとさえなってしまうえば、憎くはない。

紫式部は引用文で見苦しくない全ての女性は穏やかで、少し心の持ち方ものどかで、ゆったりとして落ち着いていることを基本としてこそ、品位も風情も趣深いとしている。つまり、心に余裕を持ち、本来の人柄が素直で壁を感じさせない人が良い女房であると考えている。そのように考える紫式部が挙げた良い女房の例が赤染衛門である。赤染衛門は道長家女房で赤染時用の娘で大江匡衡の妻である。歌人としても中古三十六歌仙の一人に名を連ね、『栄花物語』正篇の作者とされている。紫式部は赤染衛門を次にように評価している。

丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、  
匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむごとなきほど

あらねど、まことにゆゑゆるしく、歌詠みとて、よろづのことつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをふりふしのことも、それこそ恥ずかしき口つきにはべれ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えもいはいぬよしばみごとしても、われかしこに思ひたる人、にくくもいとほしくもおおえはべるわざなり。

(現代語訳)

丹波の守の北の方を、中宮様や殿のあたりでは匡衡衛門といっています。歌は格別にすぐれているほどではありませんが、実に由緒ありげで、歌人だからといって何事につけても歌を詠みちらすことはしません。世に知られている歌はみな、ちよつとした折の歌でも、それこそこちらが恥ずかしくなるような詠みぶりです。それにつけても、どうかする上上の句と下の句が離れてしまいそうな腰折れがかつた歌を詠み出して、何ともいえぬ由緒ありげなことをしてまでも、自分こそ上手な歌詠みだと得意になっている人は、憎らしくもまた気の毒にも思われるというものです。

紫式部は歌に関してには特に優れているとはしてないものの、立ち振る舞いを評価している。「まことにゆゑゆる

系しく、歌詠みとて、よろづのことつけて詠みちらさねど」とあるように歌を詠み散らかさず、品位と風情を持っているとしている。赤染衛門は紫式部の考える良い女房像に当てはまっているといえる。

次に悪い女房については次のように考えている。

われはと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立居につけて、われ用意せらるるほども、その人には目とどまる。(中略)ものいひすこしうちあはずなりぬる人と、人のうへうちおとしめつる人とは、まして耳も目もたてらるるわざにこそはべるべけれ。人のくせなきかぎりは、いかで、はかなき言の葉をも聞こえじとつみ、なげの情つからまほしうはべり。

(現代語訳)

自分こそは人とは違うふるまいをすることに慣れてしまつて、態度が人目を引くように派手になつてしまった人は、立ち居振る舞いにつけて、自分で自然と気を配っている時でも、その人には皆の目がとまります。(中略)言うことが少しちぐはぐで矛盾してしまふ人と、人のことをすぐになしてしまふ人はいっそうその人の言うことや様子に注目するといふものでしょう。悪い癖がないかぎりは何とかして

批判するようなことを少しでも言わないと遠慮し、形だけの好意をかけてあげたい気持ちになるのです。

紫式部は悪い女房として、自分こそがといった態度を取ることに慣れてしまった人、言うことが矛盾している人、人のことを貶してしまふ人が悪い女房であると考えている。その例として和泉式部と清少納言を挙げている。和泉式部は越前守大江雅致の娘であり、中古三十六歌仙の一人である。和泉式部も中宮彰子の元に出仕していた。紫式部は次のように評価している。

和泉式部という人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みぎまにこそはべざらめれ、口にまかせたことどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。(中略)恥ずかしげの歌詠みやとはおぼえははべらず。

(現代語訳)

和泉式部という人は実に趣深く手紙のやりとりをし

たものです。しかし和泉には感心しない面がありません。気軽に手紙を書き出した場合、その方面の才能がある人で、ちよつとした言葉にも色艶が見えるようです。和歌はたいそう趣深いものですよ。でも古歌の知識や歌の理論などは、本当の歌よみというふうではないようですが、口にまかせて詠んだ歌などに必ず興ある一点の目にとまるものが詠みそえてあります。それほどの歌を詠む人でも、他人の詠んだ歌を非難したり批評したりしているのは、さあ、それほど和歌に精通してはいないようです。口をいついてしげんにすらすらと歌が詠み出されるらしい、と思われるたちの人なのです。こちらがきまりが悪くなるほどのすばらしい歌人とは思われません。

引用文から紫式部は手紙のやり取りから文章の才能はあるとしているが、歌は古歌の知識もなく頭ではなく感覚で詠んでいるとし、素晴らしい歌人ではないと評価している。

次に清少納言である。清少納言は定子の仕えた女房で代表的な作品として『枕草子』がある。紫式部と清少納言は宮仕えの時期は異なるものの、紫式部にとっては意識せざるおえない存在であり、前の二人よりも厳しい口調で次にように批評している。

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍はべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすざるをりも、もののはれにすすみ、をかしきことも見すくさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなりにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

#### (現代語訳)

清少納言は実に得意顔をして偉そうにしていた人です。あれほど賢そうに漢字を書きちらしておりました程度も、よく見ればまだひどくたりない点がたくさんあります。このように人より特別に勝れようと思ひ、またそうふるまいたがる人は、きつと後には見劣りし、ゆくゆくは悪くばかりなつてゆくものですから、いつも風流ぶつていてそれが身についてしまった人は、まったく寂しくつまらない時でも、しみじみと感動しているようにふるまい、興のあることも見逃さないようにしているうちに、しげんとよくない浮薄な態度にもなるでしょう。そういう浮薄なたちになつてしまった人の行く末が、どうしてよ

いことがありますよ。

紫式部は清少納言を歌を詠むと得意顔、つまり自慢顔して偉そうにする人だと評価している。また知識がまだまだ足りないのに漢字について利口ぶって勝れている印象を見せる人は態度も悪くなって良くないと、遠回しに清少納言を酷評していることが分かる。

つまり、紫式部はどんなに他人から腹立たしいことをされても言われても、聞いても見てもそれに対して表情や言動を表に出さずに心の奥に隠しておけるかが紫式部が体験して言える宮中の女房（女性）の在り方だと考える。

三人の評価は、一見紫式部の私情が含まれた評価に見えるかもしれないが、彰子の性格やサロンの雰囲気の影響を強く受けた評価だと思う。赤染衛門については、紫式部が考える女房の在り方と彰子の性格とサロンの雰囲気に当てはまっているために、良い女房として挙げられたと考える。逆に和泉式部については、彰子が和歌を詠む際に感覚で詠むのではなく、知識を取り入れて頭で考えて詠むことから彰子に合わないと考えた。

清少納言は、自分の知識を見せびらかすなど彰子の性格だけでなく、紫式部などの彰子に仕える女房としても、宮中で働く女房としても当てはまらないと考えられる。

#### ・仕える人の違い

前文で紫式部は清少納言を酷評しているが、この二人は似ている点があり、天皇の後に仕えていることと、『枕草子』『源氏物語』のようなとても有名な代表作を残すほどの文章力と知識があることである。ではなぜこれまでに紫式部と清少納言の性格は相反しているのか。それは仕えている人物が異なるからではないかと考える。清少納言は中宮定子に仕えており、性格は積極的な方だった。しかし紫式部は中宮彰子に仕え、消極的な性格であった。では仕える人がどのようなひとであったのか。清少納言と定子はお互い仲睦まじく、定子も積極的な性格であった。それが分かる文として、『枕草子』の二八〇に次のようなエピソードがある。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。黄畑峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさげうたへそ、思ひこぞよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべなきめり」と言ふ。

#### （現代語訳）

雪がたいへん深く降り積もっているのを、いつもの

ようでもなく、御格子をお下ろししたままで、炭櫃に火をおこして、わたしたち女房が話などをして集って伺候していると、中宮様が「少納言よ。黄畑峰の雪はどんなであろう」と仰せになるので、女官に御格子を上げさせて、御簾を高く巻き上げたところ、お笑いあそばす。他の人たちも「その詩句は知っており、歌などにまでも詠み込むのだけれど、重いつきもしませんでした。やはり、この宮にお仕えする人としては、そうあるべきなのでしょう。」と言う。

まず「例ならず」に注目してほしい。これは「いつものようでなく」と訳され、つまり普段は上げられている格子がこの時は下げられていた。そして、定子が雪はどうなっているかと聞き、清少納言は格子と御簾を上げて雪が見えるようにした。これは『白氏文集』の「黄畑峰」の句によって定子が雪を見たいという考えを察知し、行動するかを見た試験のようなものであった。定子は合格というように笑い、周りにいた他の女房も定子に仕える人として素晴らしいというように褒めた。この場面から、定子が女房と楽しげに談笑しながらその中で黄畑峰という当時の女性の教養ではない漢学の知識を示すことで、より二人の距離が縮まったことが分かる。また『枕草子』を書くことになった場面ではたくさんの紙を貰い、定子が何を書いたらいいか分からないと言ったので、清

少納言が枕ですぬと言ったら、だったらこの紙あげるとして、清少納言が書き手に選ばれたということが分かる。つまりは定子と清少納言はお互いに信頼していたことが分かる。

さらに主人の性格が清少納言の性格に関係していると分かるエピソードして、次の文がある。

御方々、君達、上人など、御前に人いとおほく候へば、廂の柱に寄りかかりて女房と物語などしてゐだるに、物を投げ給はせたる、あけてみれば、「思ふべしやいなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。御前にて物語などするついでにも、「すべて人に一に思はすれば、何にかはせむ。ただいみじうなかなかくまれ、あしうせられてあらむ。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ」など言へば、「一乗の法なり」など人々も笑ふ事の筋なめり。筆、紙など給はせれば、「九品蓮台」の間には、下品といふとも」など、書いてゐらせれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。言ひとぢめつることは、さてこそあらめ」とのたまはす。「それは人にしたがひてこそ」と申せば、「しがわろきぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるるいとをかし。

(現代語訳)

お身内の方々、若君たち、殿上人など、御前に人かとても大勢伺候しているので、廂の間の柱に寄りかかって、女房と話などをして座っていると、中宮様が物を投げとお与えくださった。それをあけて見たところ、「そなたをかわいがるのがよいか、それともいやか。人が第一番でないならばどう思うか」とお書きになっていらっしゃる。御前において話などをする時、話のついでにも、「万事、人に第一番にかわいがられるのでなくては、どうしようもない。ただかえってひどくひくまれ、悪く扱われるほうがいい。二番三番では、死んでも、いやだ。第一番でどうしてもありたい」などと言うので、「それはどうやら、〃一乗の法〃といったところね」などと女房たちも笑う、あの話の筋であるようだ。筆と紙などを下ろしになったので、「九品蓮台の間に入れるなら、たとえ下品であつても結構でございます」などを書いてさしあげたところが、「ひどく意気地がなくなってしまったのね。これはよくない。いったん言い切ってしまったことは、そのままどこそ押し通すのがよい」と仰せあそばす。「それは相手によりにましてこそ」と申しあげると、「それがよくない第一番の人に、また第一番に思われようとこそ思うのがよい」と仰せになるのは、たいへんおもしろ

い。

まず、このエピソードは定子が清少納言に物(手紙)を投げたところから始まる。その場には定子と清少納言だけでなく、若君や殿上人などたくさん貴族がいたが、定子は投げるといふ方法で渡した。この動作だけでも定子の性格が垣間見えるが、さらに手紙には一番にかわいがりたいか、いやかとある。それに対し清少納言は第一番に可愛がりたいものの、中宮様にかわいがられるのであれば二番三番でもいいと返した。主人に仕える立場である清少納言としては、普通の返答だろう。しかし定子は「私に清少納言が第一番だと思われようと思うことが大事だ」と言った。つまり、定子は清少納言が第一番である、またはそれに値するくらい気に入っていることになる。また定子の言葉から積極性と自信が感じられる。清少納言はとても興味深いとしており、より定子の虜になっていることが分かる。また、定子の第一番になるためにもより頑張らなくてはならないという決意を持ったのではないだろうか。

次に、「一乗の法」と「九品蓮台」という言葉がある。これらはそれぞれ『法華経』と『和漢朗詩集・仏事慶滋保胤』からきており、仏教、宗教に関する書物である。定子に仕える女房たちは和歌だけでなく仏教や宗教に関する書物や知識を持って応用までできたことが分かる。

定子と清少納言、彰子と紫式部を比較してみると陽と陰のように感じられる。主人の性格によって、仕える女房の性格は考え、行動がだけでなく、そのサロンの雰囲気までもが変化することが分かった。

### ・齋院と齋院の女房の評価と違い

紫式部は三人の女房を取り上げて、彰子に仕える女房、宮中に仕える女房の在り方を説明し、和歌の深い知識や目立とうとせず、品位と風情があることが重要だとした。その考えを持つ紫式部は他の主人や女房をどのように見ていたのか。日記では齋院とその女房で齋院長官源為理の娘の中將の君について述べている。

文書きにもあれ、「歌などのをかしからむは、わが院よりほかに、誰か見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひいでは、わが院にみこそ御覧じ知るべけれ」などぞはべる。

### (現代語訳)

例え手紙の文面にもせよ、「和歌などの趣のあるものは、わが齋院様よりほかに誰がよくお見分けになり方がありましよう。世の中に情緒豊かな女性が生まれ出るとすれば、わが齋院様こそがきつとお見分けなさることでしょう。」などとあります。

紫式部は引用文のように齋院譚示を、一応は認めた上で次のように齋院と中將の君を評価している。

わがかたざまのことをさしもいはば、齋院よりも出てきたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはべらず。(中略) さぶらふ人をくらべていとまむには、この見たまふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを、つねに入りたちて見る人もなし、をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、ほととぎすのたづねどころにまゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれ、かんざびたり。

### (現代語訳)

自分のほうのことをそれほど誇つて言うのならば、齋院がたから作り出された歌はどうかというと、すぐれてよいと思われるにも別にありません。(中略) もしもお仕えている女房を比べて優劣を競うとすれば、私がいとも見ております中宮様周辺の人たちに必ずしも齋院がたは勝っておりませんものを、何分齋院がたはいつも内部まで立ち入って見ている人もいないし、たまに趣深い夕月夜とか、風情ある有明方とか、花見のついでやほととぎすの忍び音の尋

ね所として出かけてみると、齋院さまはまことに趣味豊かなお心がおありで、御所の様子はたいへん浮世離れがして神々しい感じですよ。

中将の君は齋院のことを一番であると褒めたたえているが、紫式部にはそうは見えていない。紫式部の評価として、齋院の女房達が詠む歌は優れていない。また、仕えている女房達を比べても彰子側の女房の方が勝れているとしている。つまり、彰子または彰子の女房がとても優れているとはつきり示したことになる。更に、日記には齋院の女房が若作りをしていることを含めて、歌も頭でしっかり考えて詠むのではなく、自分の嗜好のまま読んでいるため誰でも齋院の女房と同じレベルの女房になれると述べている。

紫式部は齋院や齋院の女房に対して酷評し、それを残していることが分かる。

### ・男性貴族（殿上人）の評価

紫式部は男性貴族に対しても、宮中行事の際の行動から様々な対応、評価をしている。これを二つの場面から説明していく。

(一) 暮れて、月いとおもしろきに、宮の亮、女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあ

らむ、妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の内侍の局に立ち寄りて、「ここにや」と案内したまふ。宰相は中の間に寄りて、まだささぬ格子を上押し上げて、「おはすや」などあれど、出てぬに、大夫の「ここにや」とのたまふにさへ、聞きしのばむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなぞす。いと思ふことなげなる御けしきどもなり。「わが御いらへはせず、大夫を心にもてなしきこゆ。ことわりながらわろし。かかるところに上臈のけぢめ、いたうは分くものか」と、あはめたまふ、「今日のたふとさ」など、声をかしようたふ。

夜ふくるままに、月いと明かし。「格子のいぐうたもと取りさけよ」とせめたまへど、いとくだりて上達部の居たまはむも、かかる所といひながら、かたはらいたし、若やかなる人こそ、もののほど知らぬやうにあだへたるも罪ゆるさるれ、なにか、あざればましと思へば、はなたず。

### (現代語訳)

日が暮れて月がまことに風情があるころに、中宮の亮が、誰か女房にあつて、特別に位があがつたお礼でも中宮さまに啓上させようというのであろうか、妻戸のあたりも、若宮のお産湯をおつかいの様子で

湯気に濡れて、人音もしなかったもので、こちらの渡り廊下の東の端にある宮の内侍の部屋に立ち寄り、**「ここにおいでですか」と声をおかけになる。**さらに宰相は私のいる中の間によって、まだ棧のさしてない藪格子の上側を押し上げて、「いらっしやいますか」など言われたが、出ていかないと、今度は中宮の大夫が、「ここにおいでですか」とおっしゃる、それまでも聞かないふりをしているのも、もったいぶっているようなので、ちよつとした返事などをする。お二人とも、まったく、何の物思ひもないようなご様子である。宰相は、「私へのご返事はなさらないで、大夫を特別にご待遇なさるなんて、もっともなことですが、よくないですな。こんな私的なところに、上官との差別をはっきりつけるなんてありますか」と、おとがめになる。そして「今日の尊さ……」などと、催馬楽をいい声でお謡いになる。

夜が更けるにつれて、月がとても明るい。「格子の下をとりはずしなさいよ」と、お二人はお責めになるけれども、ひどく品格を下げて、こんなところ公卿がたが座りこまれるのも、このような私的な場所とはいうものの、やはりみつともない。年若い人ならばものの道理をわきまえないようにたわむれていても、大目に見てもらえるだろうが、しかし私が何

でそんなことができようか、不謹慎なことだと思つので、下格子はとりはずさないでいる。

この場面は二人の男性貴族が紫式部の部屋に来て声を掛けている場面である。紫式部は二人の男性貴族から「いらっしやるか」と声を掛けられても、出ていかなかったり、ちよつとした返事をした。男性貴族達は夜が明けてきても部屋の前に座り続けて、格子をはずせというように責めていた。紫式部はこれらの行動に対し、若い人だったら大目に見てもらえるかもしれないが、やはりみつともなく不謹慎だとして、格子を外さなかった。二つ目に十一月一日の敦成親王の御五十日の祝いの出来事では次のように述べている。

(二) 左衛門の督、「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」とうかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむと、聞きあたり。

(現代語訳)

藤原公任が、「失礼ですが、この辺りに、若紫はおいででしょうか」とお覗きになる。光源氏に似ていそうな人も見えないのに、かの紫の上がどうしてここにいらっしやるのですかと思つて、私は聞き流

していた。

この場面では、『源氏物語』に出る若紫と若くない紫式部という「若い紫」の二つの意味を含めたもので、からかっている場面である。紫式部はこの行動に対して、聞き流すという対応をとり、相手にしなかった。

二つの場面から、返事しなかったり、格子と取り外さなかったりするなどの対応をしており、紫式部が男性貴族に対し良い印象を持っていないことが分かる。ここでも彰子の品位に欠ける行動する人は良くないという考えが評価に影響を与えていることが分かる。

#### ・藤原道長に対する対応と評価

紫式部は藤原道長の評価も記している。紫式部は中宮彰子の女房だったが、仕えるきっかけになった人物が藤原道長であった。紫式部が彰子の女房になった理由として紫式部の文学的な才能と深い教養があったからである。藤原道長は娘を天皇の后にして天皇家に近づくことで政治の実権を握りたいという目的があった。そのためには高度な教養と文学の知識が必要であり、紫式部を女房にした。親族としても主従関係としても深い関わりがある藤原道長を紫式部はどのように評価しているのか。二つの場面から読み解いていく。

(一) 渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわるからむ」とのたまはするにことつけて、硯にもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ  
紫式部

「あな疾」とほほゑみて、硯召しいづ。

白露はわきてもおかじをみなへしころからにや色  
の染むらむ  
道長

#### (現代語訳)

渡り廊下の戸口のそばにある私の部屋で庭の方を眺めやると、うっすらと霧がかかった朝の葉末の露もまだ落ちないころなのに、殿はお庭を歩き回られて、御隨身をお呼びになって遣水のとどこおりをお除かせになる。やがて渡殿の橋の南側に咲いている女郎花の花の真っ盛りなのを一枝お折になって、それを

私の部屋の几帳越しに上からさしかざされる、そのお姿の、まことにこちらが恥ずかしくなるほど立派なのに引きかえて、私の寝起きの顔の見苦しさが思い知られるので、「この花の歌、遅くなつてはよくないだろうな」と、殿が仰せられたのをよいことにして、硯のそばへにじり寄った。

おみなえしの露を含んで今の盛りの美しい色を見ましたばかりに、露が分けへだてをして置いてくれない盛りを過ぎたこの身の上が、つくづくと思ひ知られることでございます  
紫式部

「おお、早いこと」とにつこりされて、殿は硯をお取り寄せになる。

白露はなにも分けへだてをして置いているわけではあるまい。おみなえしが美しい色に染まつているのは、自分が美しくなろうとする心だてからであらうよ  
道長

この場面は藤原道長が女郎花の花を紫式部の几帳にかざし、それについての和歌を求めたものである。紫式部は盛りの女郎花に比べて自分の容貌が衰えていることをとても立派な藤原道長の情愛を「露」として詠んだもの

で、藤原道長の情愛が分け隔てをして盛りもない自分紫式部には置かれなれぬこと思い知らされると嘆いている和歌である。これに対して、藤原道長は女郎花が美しく染まつているのは、美しくなろうとする心があるからで、心の持ちようだと返歌した。このやり取りは主人と女房以上の関係性と即興の歌を求めていることから日常的に女房として即興を求めていることが分かる。

(二) 源氏物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずろごとも出てきたるついでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名して立てれば見る人の折らで過ぐる  
はあらじとぞ思ふ  
道長

たまはせれば、  
「人にまだ折られぬものをだれかこのすきものぞとは口ならしけむ  
めざましう」と聞こゆ。  
紫式部

(現代語訳)

『源氏の物語』が中宮さまに御前にあるのを、殿がご覧になって、いつものご冗談などもおっしゃりだ

されたついでに、梅の寒の下に敷かれてある紙にお書きになる。

そなたは浮気者ということで評判になっているから、見る人が自分のものにせずそのままに見ずしてゆくことは、きつとあるまいと思うのだが

道長

こんな歌をくださったので、

「私はまだどなたにもなびいたことはございませぬのに、いったい誰が、この私を浮気者などとは言いふらしたのでございましょうか  
紫式部  
心外なことですわ」と申しあげた。

一見ただの贈答歌に見えるが、しつかり読み解くとお互いの和歌の技術が詰まった場面である。この場面の贈答歌は『源氏物語』を読んでから交わした歌で、お互いの和歌に掛詞を複数使用している。藤原道長が『源氏物語』を読んでいることと藤原道長のからかいとその返歌を見ると、藤原道長と紫式部の仲の良さが読み取ることができる。

#### ・他人から見た紫式部

日記を読み進めていくと、紫式部が見た他人の評価だけでなく、他人から見た紫式部の評価もしつかり記されている。他の人から見て紫式部はどういう人物なのか。日記に中宮彰子と仕える女房達が紫式部について話している場面がある。

ことにいとしもものかたがた得たる人は難し。ただ、わが心の立てつるすぢをとらへて、人をばなきになすめなり。

それ、心よりほかのわが面影を恥づと見れど、えざらずさらしむかひまじりあることだにあり、しかじかさへもどかれじと、恥づかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ほけしれたる人にいとどなりはてはべれば、「かうは推しはからざりき。いと艶に恥づかしく、人に見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見おとさむものとなむ、みな人々いひ思ひつづくみしを、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる」とぞ、みないひはべるに、恥づかしく、人にかうおいらけものと見おとされにけるとは思ひはべれど、ただこれぞわが心とならひもてなしはべる有様、宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、

人よりけにむつまじうなりにたるこそ」と、のたまはするをりをりはべり。くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられたてまつる人にも、そばめたてられではべらまし。

(現代語訳)

たいていの人は、ただ自分が心にきめこんだ得意な方面のことだけをとりあげて、他人を無視するものようです。

そのような人は、本心とは違った私の面ざしを恥づかしくて気おくれしているのだと誤解するけれど、やむを得ず向かいあって一緒に座っていたことさえあるし、かくかくとまで非難されないようにしようと、別に気おくれしているわけではないけれど、面倒だと思って、もうろくしたほんやり者にますますなりきっていますと、「こんな人だとは思ってなかつた。とても風流ぶって、気が引けてしまって、近づきにくく、よそよそしい様子で物語を好んで、上品ぶり、何かというとすぐに和歌を詠んで、人を人とも思わず、憎らしい様子で軽蔑する人だと、皆思ったり言ったり憎んでいたのに、実際会ってみると、不思議なくらいおっとりしていて、こんな人かと思う」と、みなが言いますので、きまりが悪く、人からこんなにまでおっとりした者と見下げられてし

まったとは思いますが、ただこれが自分の心から進んでふるまいならしております態度で、中宮様からも、「あなたとは本当に打ち解けては会えないと思っていたのに、他の人よりも格段に仲良くなつてしまったことね」と仰せになる折々もあります。个性的で優雅にふるまい、中宮さまからも一目おかれていよう上臈の方たちからも、反感を持たれないようにしましょう。

女房達は紫式部のことを「こんな人だとは思ってなかつた。とても風流ぶって、気が引けてしまって、近づきにくく、よそよそしい様子で物語を好んで、上品ぶり、何かというとすぐに和歌を詠んで、人を人とも思わず、憎らしい様子で軽蔑する人だと、皆思ったり言ったり憎んでいたのに、実際会ってみると、不思議なくらいおっとりしていて、こんな人かと思う」と見ていた。彰子も「あなたとは本当に打ち解けては会えないと思っていたのに、他の人よりも格段に仲良くなつてしまったことね」と話している。つまり女房も彰子も紫式部の最初の印象は良くなかったことが分かる。特に女房達は紫式部のことを上品ぶる人、すぐに和歌を詠む人などという紫式部が良くないと考える女房像に当てはまる想像、評価をしていることから、苦手意識が強かったと見ることができる。

しかし、実際にあつてみたり、だんだんお互いを知つていくと、紫式部がおっとりした人物であることが分かり、彰子にいたつては一番の仲良しであると言つほど、良い評価に変わったことが分かる。

#### ・人物評価から分かったこと

『紫式部日記』の人物評価の違いや比較から、分かったことが四つある。一つ目は人物評価が中宮彰子の影響を受けていることである。『紫式部日記』に書かれている評価は、紫式部が仕えている中宮彰子の大人しく、控え目な性格や品位や和歌に関する教養や態度が伴っていない人は良くないという影響から、どの立場の人に対しても彰子の考えを中心にした評価がされていることが分かる。

二つ目に『紫式部日記』が教科書であるということである。最初はただの宮中行事の記録と消息文が書かれた日記だと思つていた。しかし、女房の在り方や男性貴族の対応などから紫式部が求め、考える宮中に必要な女房や貴族とはどういう人物なのか、どのような教養が必要なのか、宮中の男性貴族（殿上人）にはどのような人がいたのかを教える「教科書」のような役割があると考へた。つまり『紫式部日記』は前半は当時の宮中行事や宮中での出来事などの記録、後半は宮中で働いている、今後働く人に向けた教科書であると言へる。

それを踏まえて三つ目は、紫式部は「女房の紫式部」として、誰よりも一番に中宮彰子と今後の宮中や働く人たちのことを考えていたということである。中宮彰子の評価については大人しく控え目な性格になった原因や性格が与えた影響について述べられている。主人と女房がお互いに良い事も悪い事も影響し合つていふことを伝え、今後に活かせるようになっていく。また、女房だけでなく、男性についても書かれており、宮中の中の様子が分かることになっていくことから、周囲の人のことをしっかりと考えているのではないかと思つた。

四つ目にただの紫式部ではなく女房の紫式部として執筆したことである。従来「日記」というジャンルであるために個人の感想と考へられていたが、行事の部分のみでなく、女房の評価についても紫式部個人の私情ではなく、あくまで中宮彰子にお仕へしていた女房という立場で書いたと考へることができる。

以上の四つが今回『紫式部日記』の人物評価の違い、比較から分かつたことである。紫式部が日記に記した内容について、中宮彰子が関わっている事、日記がただの日記ではなく「教科書」の役割があるという新たな点を発見することができ、今後も様々な視点から研究することが必要だと考へる。

i 「乗」は彼岸（極楽浄土）に行くための乗り物のことである。つまり「一乗」とは一番の乗り物という意味になる。「一乗の法」は『法華経』方便品の「十方ノ仏土ノ中ニハ、唯一乗ノ法有リ。二モ無クマタ三モ無シ。仏ノ方便説ヲ除キ、但無上ノ道ヲ説ク」という文にあり、紫式部の言ったことを例えたものである。

ii 九品蓮台とは『和漢朗詩集・仏事慶滋保胤』の文章にある言葉で、極楽往生には九つの階級があり、上品・中品・下品の三段階がそれぞれ上生・中生・下生に分かれている。つまり九品往生をとげられるなら、下品でも叶わない、つまり彰子の側に入れるなら二番目でも三番目でも良いという意味になる。

### 参考文献

- ・『日本古典文学全集26紫式部日記』中野幸一 小学館 一九九四年九月発行
- ・『日本の作家12源氏の作者 紫式部』稲賀敬二 新典社 一九八二年十一月発行
- ・『紫式部日記 紫式部集』山本利達 新潮社 一九八〇年二月発行
- ・『日本古典文学全集18枕草子』松尾聰 永井和子 小

学館 一九九七年十一月発行

- ・『日本女性文学大事典』菅聡子 日本図書センター 二〇〇六年一月発行
- ・『古典文学鑑賞辞典』西沢正史 東京堂出版 一九九九年九月発行

### 参考資料

- ・『日本文学研究二 紫式部日記』（授業の資料） 浅野 則子

### 〔付記〕

本論は令和六年度別府大学文学部卒業論文の一部を研究ノートとして掲載したものである。